

士師記の“繰り返し”(循環)

士師記の物語はイスラエルの民の背信、不信仰により外敵からの災難、心を入れ替えて悔い改め、神は救助者・士師を起こして下さり、その結果“平和”が回復され、士師は死にます。しかし、時が経つとまたイスラエルの民は神へ反逆を繰り返します。

このように士師記を読み続けるとこの国も同じ歴史を繰り返していることに気づきます。

我が国も同じです。8月27日、9月3日の週報に加藤明兄が戦中、戦後の国民の姿をリアルに教えて下さいました。巻頭言では加藤牧師が「士師記から学ぶこと」と題して、「この愚かな歴史から私たちは何を学びとるべきなのでしょうかと警告されました。

士師の時代は紀元前1200年の頃のことですから、今から3千年前の歴史が語られているのです。この3千年間、人間は進歩することなく歩んできたということでしょうか。

7月、8月に創世記を教会学校で学びましたが、今でもわたしのところに強く残っている「ことば」があります。『人が心に思うことは、幼いときから悪いのだ。わたしは、この度したように生き物をことごとく打つことは、二度とすまい。』(創世記8:21)。

「神の忍耐」を人は無視していいのでしょうか。「神の愛」に人は気づかないのでしょうか。

(山下誠也)